

金融資産 形成術



投資の極意 教えます

第12回

合同会社フィンウェル研究所 代表 野尻 哲史

安く買って高く売れば投資は儲かる

これまで退職後の生活のための「資産形成」と退職してからの「資産活用」について話すことが多くありました。しかし、「資産活用」で大切な「取り崩し」に関して理解を得るのはなかなか難しいものです。そこで、「投資の極意」という切り口で2つを比較して、それぞれの効用を考えてみたいと思います。

投資で儲けるには、「安く買って、高く売る」ことができればいい。これが投資の極意です。とはいうものの、これが簡単ではないため、資産運用にはアドバイスが必要になります。その際に、ここで説明するようなロジックで考えると、その極意はより身近なものとして、比較的分かりやすくなると考えます。

まず、「安く買って、高く売る」という行為を、簡単にするために2つに分けます。

安く買う＝「安くなったら(たくさん)買って、高くなったら(少ししか)買わない」

最初は「安く買う」です。これは資産形成の考え方と同じです。安く買うためには、今の価格が安いかどうかの判断が必要になりますが、一般にはこれが大きなハードルでしょう。多くの人が、「投資はいつ始めたらいいいのか」といった質問をする場合に、いつ買ったらいいいのかという「買いのタイミング」のアドバイスを求めているのですが、これに答えるのは不可能です。

そこで、この「安く買う」を、さらに2つに

分けて、「安くなったら買って」、「高くなったら買わない」という、一段緩やかな考え方に変えてみましょう。「安く買う」が“最も安い値段で買う”というように捉えられがちになる点からすると、「安くなったら買う」という行為は、相対的な表現です。そのため「買う値段」に対する負担がより軽くなっている感じがします。もちろん「高くなったら買わない」も、より相対的な表現となることで「安く買う」という負担を軽減しているように感じられるでしょう。

さらに、「安くなったら買って、高くなったら買わない」という表現に、数量を加えることで、実現可能性がより高くなります。具体的には、「安くなったら(たくさん)買って、高くなったら(少ししか)買わない」というように()の中に量を補ってみます。そうすると、「高くなったら買わない」のではなく、「少ししか買わない」、すなわち「高くなっても少しだけ買う」ということに切り変えることができます。

これが積立投資の考え方の基本

実はこれが定額による積立投資の発想です。例えば、常に5万円の資金で毎月、投資信託を使って資産形成を行うとします。1万口当たりの価格である基準価額が1万円の場合には5万口購入できますが、これが1万2000円に上昇すれば、4万1666口と“少ししか買わない”ことになります。逆に8000円へと安くなれば6万2500口と“たくさん買う”ことになります。すなわち、積立投資は、投資で儲ける方法の「安く買う」を実現するより簡単な方法といえます。

当然ながら、この方法ではいつ資産形成を始めるかは問題にならなくなります。買うタイミングを計る必要がないということです。ただ問題は、資産形成をしている間は、投資商品を「買うステージ」だという認識をしっかりと持ち続けられるかどうかにかかっています。これまでセミナーなどで、長期投資とか分散投資といった考え方を説明しても、最後の質問コーナーでは、「ところで●●という投資信託は最近値下がりしているのですが、もう売った方がよいですか?」とか、「●●投信はかなり値上がり

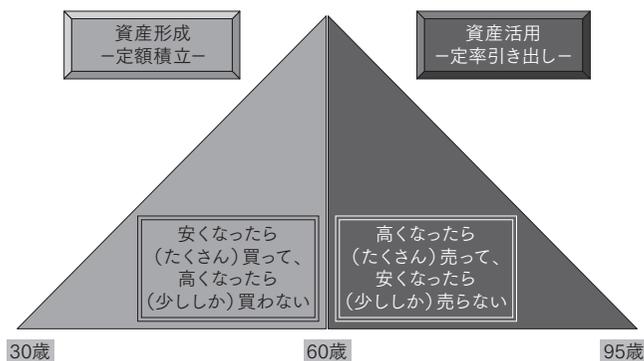
したので、そろそろ売った方がよいでしょうか？」と聞かれることが多々あります。

これは、価格が下落すると「さらに値下がりして売る時に損をする（儲けが少なくなる）」と心配し、価格が上昇しても「ここで売っておかないとせっかくの儲けが少なくなる」と売る時のことを心配しているからです。しかし、一般に資産形成は、資産を積み上げていく時期なので「売る」ことを考える必要はありません。にもかかわらず、今日、明日、明後日の価格が気になって、買うことよりも買った後の「売る時」を気にするようになってしまうのです。資産形成層が、その資産を売る時は、20年、30年先の話のはずです。この点で、実は資産形成のアドバイスは、顧客のカウンセリングが重要だというのもよく分かります。

高く売る＝「安くなったら（少ししか）売らないで、高くなったら（たくさん）売る」

次は、その20年、30年先の売却するときを考えてみましょう。大原則は「高く売る」ということになります。しかし、これも買う時と同じように「いつが高いのか」、「今は高いのか」を判断することは非常に難しいといえます。そこ

【図表】 資産形成と資産活用で成功する極意に一步近づくために



出所：合同会社フィンウェル研究所

で、こちらも2つに分けて、「安くなったら売らない」で「高くなったら売る」と理解します。さらに、ここに数量の考えを入れて、「安くなったら（少ししか）売らない」で、「高くなったら（たくさん）売る」と考えると、資産形成の時期の考え方の逆になることが分かります。これが資産を取り崩す際の考え方、資産活用の極意といえます。

これが定率引き出しの考え方の基本

これを具現化するのが、“残高の一定率”を引き出す（売却する）という「定率引き出し」の考え方です。

例えば、運用している金融資産が1000万円あり、それを毎年4%という一定率で引き出すことを考えます。最初の年の引出額は、1000万円×4%で40万円となります。この資産が次の年に大きく値上がりして1500万円になれば、その年の引出額は、1500万円×4%で60万円になります。また、大きく値下がりして資産が500万円になると、引出額は20万円になります。

つまり、引き出す金額を「率」で決めておくと、値上がりして残高が増えると引き出す金額が大きくなり、値下がりして資産の残高が少なくなると引き出す金額が小さくなります。しかも、これが自動的にできます。言い換えると、定率引き出しは、「安くなったら（少ししか）売らない」で、「高くなったら（たくさん）売る」ことを具体的に実行する方法といえます。

この2つをまとめると、現役時代は「定額積み立て」で安く買って、退職後には「定率引き出し」で高く売ることができ、投資で成功する極意に一步近づくというわけです【図表】。

のじり さとし 1959年生まれ。定年後に継続雇用としてフィデリティ退職・投資教育研究所所長を続けながら、2019年5月に合同会社フィンウェル研究所を設立し代表就任。試算の取り崩し、地方都市移住、雇用継続などの退職後の生活に関する提言を行っている。日本証券アナリスト協会検定会員、日本FP学会、行動経済学会などの会員。著書には「定年後のお金」（講談社＋α新書）、「脱老後難民 英国流資産形成アイデアに学ぶ」（日本経済新聞出版社）など多数。